



九歩目 小倉教会

小倉教会では、大変な日々が続く中で何かを分かち合いたいという思いから、昨年11月4日に「どうぞのたな」を設置しました。屋根のついた棚の上には、保存できる食品や除菌ティッシュなどの生活物資が所狭しと並べられています。隣にはひと休みできるベンチも置いてあります。小さなスペースですが、物資を提供してくださる方と、物資を必要とするお方をつなぐ役割を果たしています。

スタートしてわずか1か月で395点もの食品が提供されたそうです。小倉教会は、在留外国人の方が行き交う通りに面していることから、英語による案内表示もなされています。伝道開始130周年を迎えて、これからも多様な人びとと共に生きようとする教会員の思いがよく現れている取り組みであると感じました。



十歩目 苅田教会

昨年11月8日、富野教会から福田昌治協力牧師をお迎えして、教会組織30周年・会堂建築10周年記念礼拝を行いました。井本義孝牧師ご夫妻から贈られたクッキーの詰め合わせが、記念品として配られました。井本先生は西南神学専攻科修了後にドイツで社会福祉を学ばれ、千葉教会の新規伝道に仕えながら、社会福祉事業の重責を担っておられます。神学生の時代から苅田伝道所で奉仕いただいたご縁で、祈りに憶えてくださっています。

近年は、かつての母教会である富野教会との交流を意識的に行っています。2月28日の主日礼拝は黄仁坤牧師による交換講壇でした。特別賛美の相互交流もあり、うれしいひと時となりました。西南女学院中高の生徒さん達をお迎えしての、教会学校中高科を再開できる日が来ることを心待ちにしています。



これからの予定

4月6日(火)地方連合役員会18時

4月29日(木)地方連合総会10時

いずれもオンライン併用での開催です。

宣教支援センターHP&Facebook

ニュースレターなどのバックナンバーを閲覧するにはパスワードが必要です。

HP: <http://bapkitaq.jimdo.com>

パスワード: kitag2015



郵便振替 01590-7-3255 加入者名 バプテスト北九州地方連合
通信欄に「宣教支援センター支援献金」と明記してください。

バプテスト 北九州地方連合ニュース

発行日:2021.03.28 | Vol.45 | 発行者:山崎克明

発行所:〒803-0846
北九州市小倉北区下道津 2-15-21
Tel: (093)561-0772
Fax: (093)561-0760
シオン山教会内
北九州地方連合 総務財務委員会



教会の可能性 ～信徒研修会を終えて～

今年度の信徒研修会は、1月30日、福岡県に緊急事態宣言が出される中、豊前教会を会場に、YouTube 配信にて行われました。テーマは「牧師の兼牧について『教会の新たな可能性を考える』～」。「兼牧」をテーマにした研修会は、少なくとも連合内では初めてだったと思います。本山牧師(豊前教会)よりテーマ設定の説明がありました。その中で、教派によっては、すでに3割以上の教会が「兼牧」を行っているという情報も分かち合われました。その事情はわかりませんが、財政的に牧師を立てられない教会が増えている中で、「兼牧」は一つの選択肢となっていくのだろうか。特に、私たちの連合では、田川教会、上穂波教会、戸畑教会の消滅・解散を受けて、様々な地域協働の取り組みが行われてきました。その取り組みの延長線上に、「兼牧」という可能性があるのではないかと分かち合われました。

研修会の講師は、西南学院大学神学部教授の濱野道雄先生でした。濱野先生は、「兼牧」という選択肢が、経済的な課題や献身者の減少によって、しろうがなく選ばれる道とは限らない。むしろ、無理して一人の牧師を立てるより、より良い選択肢となる可能性もあると言われました。ただし、課題もあります。特に「兼牧」は、複数の教会が協力しなければできません。教会と牧師だけでなく、共に牧師を立てる教会同士もまた、契約を結んでいく必要があるかもしれません。何を委託するのか、どういう責任と権限を任せるのか等。「兼牧」と言えば、一般的に、「一人の牧師が、複数の教会を兼任すること」ですが、招聘制をとっている私たちの場合、「複数の教会が協力して、一人の牧師を立てていく」という出来事であって、問われているのは教会同士の協力であると言えるでしょう。でも、もし「兼牧」を通して、複数の教会の協力関係が深められるならば、1教会1牧師では生まれない可能性が広がるかもしれません。

今という時代にあって、改めて、教会とは何か、教会の使命とは何か、新しく聖書から聴いていきたいと思われました。【村田悦(大分)】

開催日:2021年1月30日(土) 会場:豊前キリスト教会

PickUP! CONTENTS

- ➔ 集会報告 「信教の自由を守る日集会 報告」
- ➔ 地域共同 「大分地区3教会による協力伝道」
- ➔ 連載 「主事さんぼ 小倉教会・苅田教会」

コロナ禍の中で信教の自由を考える

2月11日、「2・11 信教の自由を守る日」集会在東八幡教会とオンラインで開催された。講壇には大変美しいお花が活けられている。講師は南小倉教会の谷本仰牧師。NPO 法人抱樸の副理事長、バイオリン奏者、音楽療法士でもられる。スクリーンに次々とスライドを写し、なめらかな口調で聴衆に語られた。以下、その概略。

1. 信教の自由を守る日

「建国記念日」(紀元節)への信仰的抵抗。プログラム裏面掲載の藤田英彦委員による詳細な説明でその意味が良く分かった。信教の自由は、「私の信仰」に関わる。解き放たれる自由と自分で選び取る自由、その両方を真剣に考える。

2. コロナ、教会を直撃

礼拝、諸集會に影響。しかし「集まること」は正義で善か。20世紀は加速度的に都市化した。教育も文化も労働力も。そして教会も。限界を超えていないか。出会いすぎ、高密度。引きこもりは防衛反応でもある。コロナは「密が好き」(谷本先生がコロナにインタビュー)。精神科医・斎藤環「臨場性の暴力」。

3. 「ひとり」を改めて考える

神は名を呼ばれる(モーセ、サムエル、エリヤ、等々)。キング牧師の「キッチンでのヴィジョン」体験と谷本先生の西本町交差点での「お前や」体験。逃げ遅れたサマリヤ人。先生の体験談は臨場感たっぷりです。後まで私の「お前や」を考えることになった。

ここでバイオリン「誰も知らないわたしの悲しみ」の演奏。聴き惚れました。

苦しみの意味。フランクの『夜と霧』。D.ボンハッファー『共に生きる生活』より、一人であることのしるしは沈黙。聖書を一人で読むこと。「ひとり」の復権。このコロナ禍の時を「ひとり」を得る機会とする。ひとりへと解き放たれる自由。ひとりを選びとれる自由。

4. 祈ること 共に生きる隣人

コロナ禍の中で答えが見えない。性急になり、閉ざされ、孤立し、固執する。米大統領選。2013年ある女性の発信から広がった black lives matter。白人至上主義とメシアニズムと暴力。ネトウヨとの親和性。陰謀論。『十字架とリンチの木』(J.H.コーン)。答えを急がず共に生きる。斎藤環「不確実性への耐性」、内田樹「宙吊りの読解」、帯木蓬生「ネガティブ・ケイパビリティ」。抱樸での経験知。教会でも。祈り委ねることが大事。

谷本先生は幅広く雑駁に述べたに過ぎないため自分で追及してほしいと加えられた。私はパソコンに写っている画面をスマホに撮った。追及する準備万端である。

5. 南小倉バプテスト教会では

南小倉教会の現在の状況を語られた。信仰告白作成、「網の教会」サポーター制度、緊急事態宣言後、月・金ランチ。バザーも、雑煮大会も。どうそのつくえ(名店長ヨッキー)。見守られているという安心。与えられ委ねられている。委ねることと生きること。例えば物語の分有として思い出話。金芝河「天は分かちくろうもの」。大吉(谷本家の猫)の死と埋葬。ペットでなく異種家族だった。風は思いのままに吹く。委ねて生きる。「イエスはあなたがたより先に行く」。終わりは始まり。

閉ざすのではなく広がる、占有するのではなく分かち合う、共に生きることが求められている、と希望に満ちた言葉で締められました。講演後、主の祈りを全員でささげ解散。余韻が残った集會でした。ぜひYouTubeで検索してご覧ください。

会堂参加者 31人 YouTube 参加者 113人【黒岩英子(高須)】



協力伝道の集い in 大分

初の試みとなった「協力伝道の集い in 大分」は、大分地区三教会牧師会(大分教会・村田牧師、別府国際教会・酒井朋宏牧師、臼杵教会・松永正俊牧師、永松博)の発案によって、昨年9月30日(日)午後1時~2時半の間でWeb(Zoom)にて開催されました。

きっかけは、ふたつ。まず「協力伝道についての課題を教会のものとして考えていきたい」との各教会の願いです。大分県の三教会は、連合集會などは物理的距離が遠く、多くのメンバーと参加することが難しい場合もありました。そのような中でも、「協力伝道」の課題は、教会の課題として身近に考えたいとの願いがあったのです。次に、三教会がそれぞれの節目(大分…次年度創立70周年、別府国際…中長期計画終盤、臼杵…次年度宣教開始70周年)を前にしていたことも大きな要因でした。三教会がそれぞれ新たな宣教方針を考える時期に「各教会がバラバラに宣教方針を思い描くより、各教会のこれまでの歩みを分かち合い、振り返り、これからの宣教を一緒に考えたい。協力できることもあるかもしれない」との思いが一致し、「協力伝道の集い in 大分」が企画されていきました。

企画中、コロナ危機で一つの場所に集まること、外部講師を立てること、諸準備等々が厳しい状況となりました。けれども「協力関係は密にしていきたい」、「これからの宣教を一緒に考える機会を設けたい」との思いから、最終的に各教会が試行していたインターネット技術(Zoom)で教会同士をつなぎ、教会員の中から立てられた代表者が自分の教会の取り組みを紹介し、互いを知り合おうと準備が進められ、当日を迎えました。

教会間をネットでつなぐのは新しい感覚でしたが、「協力伝道の集い in 大分」の参加は33名(大分11名、別府国際9名、臼杵教会13名)で、以下のプログラムで行われました。

【「協力伝道の集い in 大分」プログラム】

(ZOOM 接続テスト)

1. 祈り(酒井)
2. 趣旨説明(村田5分)
3. 各教会からの発表(15分×3)
大分教会→臼杵→別府国際教会
4. 質疑応答・協力の提案(20分)
5. 祈り(永松)

発表・質疑応答は多くの参加者同士の声が変わる活発な場となりました。以下、参加者の声。「懐かしい顔も見えた。顔を見ながら、話し合うことができるとても良かった」、「普段このような集會に参加できないが、ネットだから参加できた」、「他の教会の様子が聞けて、とても励まされた」等。また、協力の提案の時間には

「お互いを知り、祈り合うために新聞を発行してはどうか」との意見が出され、各教会員や三教会牧師会が寄稿・編集などを協力して『三つよりの糸』(コヘレト4:12)という新聞も発行されはじめました。

次年度は5月30日(日)に、それぞれの礼拝に三教会から証者を派遣しあう三教会の「協力伝道の日」も計画中です。

【永松博(臼杵)】

